
バカと幼馴染と召喚獣

takumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと幼馴染と召喚獣

【Nコード】

N0879U

【作者名】

takumi

【あらすじ】

この作品はバカとテストと召喚獣をモチーフにしたオリジナル小説です。主人公、北条銀河は幼馴染の明久と同じ観察処分者だが、Aクラスの学年主席レベルだった。しかし、明久と同じFクラスへ入った。F組のメンバーと面白おかしく過ごしていく物語です。カップリングはオリ主ハーレム明久微ハーレムなどです。

- ・最終的にはこれに収まりました。

只今書き直しをしております。読者の皆様申し訳御座いません。

二年の始まり

・銀河side

「遅刻だー？」

どうも皆さん。北条銀河です。えーっと只今の状況を説明しますとね…

「何で、2人揃って目覚まし時計が止まってるんだよ？」

「知らないよそんな事？それより急がないと鉄人の補習だよ？」

「二年初っ端から補習は嫌だぞ？」

「だったら、走るよ？」

「了解？」

遅刻しそうなので走っています。ついでに俺と一緒に走っているのは吉井明久、俺の1番の親友です

2

「遅いぞ！北条、吉井！」

「げっ！鉄人？」

「誰が鉄人だ？」（ボカ！）

「痛？いきなりなにするんですか？」

「鉄人と呼ぶからだ！全く…ほら、お前から最後だ」

そう言つて鉄人が封筒を俺と明久に渡す。因みにこの人は西村先生。生活指導を担当している。生徒からは鉄人と呼ばれている。

「どうも」

「ありがとうございます」

そう言っつて中身も確認せずに封筒を服にしまっつ。

「中身は確認しなくてもいいのか？」

「ええ」

「どうせ僕達は途中退席でF組ですからね」

「明久の言っつ通りです。それじゃあ行きますね」

「おう。早く行けよ」

「「はい」」

俺達は鉄人と別れて校舎に入っつていっつた。

幼馴染達との再会

・ N O s i d e

「明久。どうせ遅刻だしAクラスの教室見に行こうぜ」
「そうだね。折角だし見て行こうか」

・ Aクラス前

「デカイな」
「デカイね」

去年は踏み入れなかった3階。
そこで目にしたのは巨大な教室だ。

「へー個人エアコンに冷蔵庫完備か」
「リクライニングシートにシステムデスクつて…ここ本当に教室？」
「全く金の無駄遣いとはこの事だな」
「でも、銀河の本家の自室ってこれより大きいよね」
「…まあな。そろそろ行こうぜ」
「そうだね」

Aクラスを去ろうとする2人。

「誰だ」
「!!!？」

明久の目が誰かの手に塞がれる…

「えっ？う、うわ！？」

が、明久がその手を振りほどき素早く腕を取り関節を決める。

「痛たたた！！明久痛い痛い！！」

「よ、夜美！？どうしてココに？ってごめん！！」

急いで関節をとく。

「もう。酷いじゃないか明久」

「ごめん。咄嗟に…って何で夜美がここに？」

「今日から文月学園に転校して来たんだよ」

「転校？じゃあ由仁もいるのか？」

今まで空気だった銀河が聞く。

「うん。今は…「夜美」！「あつ！姉さん」ここだよ！」

黒髪でポニーテールの女の子が走ってくる。

「もう！先にいかないでよ」

「ごめんごめん」

「まあまあ由仁もそこら辺で勘弁してやれよ」

「そうは言ってもね。銀河」

「折角再会したんだからな」

「うん。分かった」

「そうそう」

「夜美は調子に乗らない」（ポコ）

「痛て。ううゝ明久に殴られた」

「軽くでしょ。人を置いて行った罰よ」

「はは！所で2人は何クラスなんだ？」

「「Fクラスだよ（よ）」」

「えっ！でも2人ともAクラス並はあったよね」

「振り分け試験までに転校手続きが間に合わなかったんじゃないのか？」

「銀河の言うとおりのよ」

「まあ、明久達と一緒に嬉しいけどね」

「そうなんだ。まあ、よろしくね」

「よろしくな2人とも」

「「よろしく」」

「それじゃあFクラスに向かうか」

「ええそうね」

「うん」

「レッツラGOー」

・Fクラス前

「これはまた…」

「Aクラスとはまた違った意味で凄いわね」

「まあ、住めば都とも言うしな」

「そうそう。じゃあ私から行くよ。すいません、ちょっと遅れちゃいました」「とつと座れ！！このウジ虫野郎！！」「ふえ？」「ドサ
ブチ

「なっ！？お、女！？す、済まん！？これは冗談だから泣かない
でくれ！！」

「私…ウジ虫野郎じゃないもん…明久」

「大丈夫だよ。夜美。（ナデナデ）さて雄」

「あ、明久？」

「カクゴハイイヨネ？」スチャ

「「うーす」」

それぞれが席に着く因みに明久が後ろから二列目の窓際の二つ目その右隣に夜美。窓際に雄二。銀河はその後ろ由仁は銀河の右隣である。

「えー、おはようございます。Fクラスの担任を務めます……福原慎です。よろしく願います」

黒板に名前を書こうとしたがチョークがなく視線をみんなの方に戻した。

「皆さん全員に、卓袱台と座布団はしきゅうされていますか？不備があれば、申し出てください」

「俺の座布団、綿が入っていないんですけど」

「我慢してください」

「俺の卓袱台、脚が折れています」

「木工ボンドが支給されているので、後で自分で直してください」
「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

一つ一つの質問に丁寧に答えていく福原先生。しかし大半が大きく分けて、「我慢してください」か、“自分で何とかしてください”の二択のみ。

これがFクラスである。

「では、必要な物があつたら、極力自分で調達する様にして下さい」
「これがFクラスか…」

「まあ、しょうがないよ。明日綿持って来て入れようよ」

「そうだな……」

「それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

「さて、どんな人がいるのやら……」

自己紹介だよ

・銀河side

さてさて、まずは誰かな？

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」

まず最初は木下秀吉。俺と明久の幼馴染の一人であり明久に恋愛心を抱いてる男の娘。容姿が双子の姉である木下優子に瓜二つである為に違和感は特にない。因みに俺はその恋愛を応援しており只今性転換薬を開発させている。

お！明久に気付いて頬を少し染めながら手を振っている。明久も気付いて手を振り替えている。初々しいな。

「…土屋康太」

次にムツツリー二事、土屋康太。

本名は知られておらず、異名であるムツツリー二の名は割と知られている存在である。

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話ができるけど、読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は…」

一旦区切り、隣にいる水色の髪をした少年を見てから一言。

「白石俊也を殴る事です」
「ちよつと美波!?!どう言う事!?!」

今、言ったポニーテールの女の子は島田美波。ドイツからの帰国子女である。

今ツッコミをいれたのは白石俊也。中学の頃からの友達である。両親を事故で亡くしており今は妹と二人暮らしで有る。絵を描くのが得意で、時々美術展にも出品して生活費などを稼いでいる。確かAクラス並の学力を持っていたのだが…おそらく、恋心を抱いてる島田と一緒にいたいためにFクラスに来たのだろう。ついでに俺達は俊と呼んでいる。

「えー。白石俊也です。絵を描くのが得意です。1年間よろしくお願いします」

その後は淡々と進んでいく。

「服部瞬でござる。皆の者1年間よろしくでござる」

これまた知り合いでこちらは幼馴染である服部瞬。

刀が得意で昔知り合いがヤクザにひどい目に合わされたと聞き一人で刀を持って乗り込みそのままその組丸々潰して来たことがある。おかげでヤクザの中では怒れる侍と恐れられたりするが、本人は極めて優しく温厚である。こいつもAクラスにの学力を持って居るが途中退席した女の子に付き添いFクラス入りとなった。

つと、次は俺か…

「えーつと、北条銀河だ。一応、明久、秀吉、そこにいる伊藤姉妹と瞬とは幼馴染だ。」「」「何ーーーーー!!!!!!」「」「な、

何だ？」

「許せん！あんな美人姉妹と幼馴染なんて！」

「全くだ！あの2人は俺の物だ！」

「なら、木下は俺の物だ！」

「残念ながら私は銀河の物よ」

「私は明久の物だよ」

「わしも明久の物じゃ」

「「「ちくしょーーーーー！！！！！！！！」」」

わけ分らん。取り敢えず座る。

「今日から転校してきた伊藤由仁です。因みに私は銀河の物なので、告白してきても意味ありませんので」

由仁がさつき騒いだバカどもに向かって言う。

「私も今日から転校してきた伊藤夜美です。私も明久の物なので告白しても無駄だから。因みに私は妹だよ」

これまたすごい事言う。次は明久か。

「えーっと、吉井明久です。まず一言、銀河や夜美、秀吉など他に僕の友達を傷ずついたら許しませんのであしからず」

「「「は、はい……」」」

明久が殺気を出しながら言う。

ガラッ！

不意に扉を開けた音が聞こえた。そこにはピンクの髪をした女の子が立っていた。

宣戦布告と謎の者たち

・明久side

僕の自己紹介が終わる頃不意にドアを開ける音がした。

そこにはピンクの髪をして胸に手を当てている女子生徒だった。

その姿に男子生徒全員（一部を除く）が意外を通り越したかのように驚いた声上がる。

「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします！」

途中から尻すぼみを自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

「はいっ、質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいますか？」

傍から見れば失礼な質問だがほぼ全員（銀河、明久、瞬を除く）がそう思っていた事だった。

彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主である。

因みに瞬に恋心を抱いている。瞬も同じように恋心を抱いてるが、お互い素直になれずにいる。

「そ、その…振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決

まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

ついでに、姫路は瞬が付き添い保健室に向かった為瞬も0点扱いである。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ1人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年1番の大嘘をありがとう」

その様子を見ていた銀河が一言。

「…想像以上にバカが多いようだな」

「…全くだね」

「…ひどい言い訳だな」

「…姫路殿。大丈夫でござろうか？」

それぞれの感想を言っていた。

「で、ではっ、今年1年よろしく願いします！」

姫路さんは逃げる様に瞬と俊の間に空いてる席についた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしま

う。

そして、瞬が姫路さんに話しかける。 頑張れ瞬。

「ひ、姫路殿。体調は大丈夫でござるか？」

「は、服部君！？え、えつと…大丈夫です…」
「そ、そうでござるか…よかったでござる」
「す、すいません…急に驚いてしまって…」
「べ、別に気にしておらぬよ。姫路殿」

これを見ている僕達は…

「初々しいね」
「全くだね」

「あれは絵になりそうだな。スケッチブック、スケッチブックと…」

自由気ままな3人である。

「何やってんだお前らは…」

そこに雄二が話しかけてくる。

「何やってんだって…」

「あそこにいる初々しい2人を見てるんだよ」

「ついでに俺はそれを絵にしている」(カキカキ)

バンバン！

「はいはい。その人たち、静かに」

バギィツ！バラバラバラ…

「してください…ね？」

本人としては、軽く叩いたつもりだろう。
だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

「え〜。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていて下さい」
「どんだけひどい設備何だここ？」

「これがFクラスです」

「…すごく分かりやすい回答をありがとうございます」

そう言つて、福原先生は教室を出て行った。さて、始めますか。

「…銀河」

「…ああ」

小さな声で会話をする僕と銀河。取り敢えず雄二と俊と瞬辺りに声をかけますかね。

「雄二、俊ちよつと話があるから廊下に行かないか？」

「ああ。別にいいぞ」

「俺も描き終わったしOKだ」

雄二と俊は銀河が声をかける。

じゃあ、僕は…

「瞬。ちよつと話したい事があるから廊下に来てくれない」

「話とは何でござるか？」

「設備改善についてだよ」(ボン)

「なるほどの…分かったでござる」

「ありがとう。それじゃあ姫路さん。ちよつと瞬借りるね」

「あ、はい。どうぞ」

既に銀河達は出てる様だし早くしないとね。

・教室廊下

「んで、話つてなんだ？」

「な〜に。簡単な事だよ」

「簡単な事？何だよそれ？」

「今の設備を改善する為に試召戦争を起こそうって話だよ。それもAクラスにね」

「Aクラスでござるか？まあ、このメンバーならできなくはないと思うでござるな。拙者は賛成でござる。姫路殿をいつまでもここに置いて置くのは僥びないでござるし」

「2人は？」

「俺も賛成。美波をこんな所において置くなんてできるか」

俊、瞬は賛成。

「雄二はどうするんだ。最終的には代表であるお前の許可がいるからな」

「ふっ！安心しろ。元々俺自身試召戦争をやるつもりだった。世の中学力こそが全てじゃないって事、その証明がしてみたくてな」

「なら、OKって事だな」

「ああ、任せておけ。Aクラスに勝つ為の作戦も考えてある」

「それじゃあ、頼むよ雄二！」

「おう！っと…先生が来た。入るぞ」

「…「ああ（うむ）」」」

・教室

「ねえ、明久」

「何夜美？」

「一体、何話してたの？」

「すぐ、分かるよ」

「それでは、坂本君自己紹介をお願いします」

「はい」

「そう言えば、坂本君は代表でしたね。では教壇の方をお願いします」

「はい」

雄二が教壇まで歩いていく。何か威厳に溢れている感じがする。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は坂本だろうと代表だろうと好きなように呼んでくれ」

「じゃあ、霧島雄二」

「やめろ！銀河！それはまじで!？」

「はいはい」

「コホン。さて、皆に一つ聞きたい」

そう言つて、雄二は全員の間を見るように告げる。

「カビ臭い教室。古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台」

皆雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが.....」

一呼吸おいて静かに告げた。

「……不満はないか？」

『『『おおありじゃあつ!!!!!!!!!!!!!!』』』

ここでクラス全員の声が重なった。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!!!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる!』

うわー。提案しといて何だけど、凄いなこれ。

「皆の意見は最もだ。そこで」

雄二は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、こう告げた。

「これは代表としての提案だが……俺達FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う!!!」

Fクラス代表坂本雄二は試験召喚戦争の引き金を引いた。

・ N o s i d e

雄二が試験召喚戦争の引き金をひていたその頃とある場所では……

「それじゃあ、こいつらを殺せばいいんだな？」

今喋った少年は文月学園男子生徒の服を着ている。因みに赤髪のか
なりのイケメンである。

「こんな子供2人に私達が出向く必要があるのか？」

一方、こちらは文月学園女子生徒の服を着ている。闇のような真っ
黒な髪をポニーテールにしている。

「舐めてかかるなよ？2人とも。こいつ等は下手をしたらお前等以
上の実力者だ」

そして、モニターに映る30代前後の男。かなりの威厳をはなつて
いる。

「なら、俺はこちらの金髪の男。北条銀河を殺ろっ」

「私はこちらの吉井明久を殺るとするか…」

「頼んだぞ。2人とも」

「分かった(了解した)」「」

そうしてモニターが切れる。

「では…行くとするか」

「ええそうね」

「文月学園へ」「」

巨大な闇が迫ろうとしていた。

勝てる要因

・明久side

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとって現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てる訳がない』

『これ以上、設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいれば何もいらぬ』

『俺は伊藤姉妹がいればご飯10杯はいける』

否定的な意見が教室内の至るところから上がる。
なんか、関係ない事を言ってるバカもいるけど…

まあ、みんなが否定的なるのも仕方がない。

この文月学園は1時間の間ならいくつでも問題を解いていい事になっている。だから、Fクラスは100点も満たない点数しか取れない。バカだからね。けど、Aクラスは300点は取るからAクラス1人に対してFクラスは5、6人で当たらなければ勝てない。

「いや、そんな事はない。俺が勝たせて見せる」

そんな否定的な意見も気にせず雄二が言う。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろ』

『何の根拠があつてそんなことを』

普通に考えればそうだけど、このクラスならAクラスともやりあえる。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。今からそれを証明してやる。おい、康太。置に顔をつけて姫路達のスカート覗いてないでこっち来い」

「……？（ブンブン）」

「は、はわっ」

「ふえっ」

「きやつ」

「康太殿、何をやっているのをごさるか？（愛刀黒椿を抜きながら迫る瞬）」

「全くだね。ムツツリーニ（棍を出して迫る僕）」

「全く…お前らやめとけ。てか、ムツツリーニは下着を見た時点で鼻血を出すから見えてないと思うぞ」

「それもそうだね（そうでごさるな）」

「……（コクコク）」

銀河が僕らを止めてる間にムツツリーニが雄二の隣に行く。

「こいつは土屋康太。あの有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

「……？（ブンブン）」

土屋康太という名前はそんなに有名ではない。でも、ムツツリーニという名前は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑をもって挙げられる。

『ムツツリーニだと…？』

『馬鹿な、やつがそうかどうか…？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ…』

『ああ。ムツツリの名に恥ない姿だ…』

畳の跡を手で抑えている姿が果てしなく哀れを誘う。たとえどういった状況であろうとも、自分の下心は隠し続ける。異名は伊達じゃない。

「「「???」」」

姫路さん、由仁、夜美はよく分かっているようだ。教えてやるべきか？ただのムツツリスケベだということを。

「それに、姫路瑞希、白石俊也、服部瞬もいる。この三人は言わずとしたAクラス並の学力の持ち主だ」

「えっ、わ、私ですか？」

「俺もか？」

「拙者もでござるか？」

「うちの主力だ期待している」

『そうだ、俺達には姫路さんがいたんだ』

『服部と白石って毎回テストで5位以内に入ってるんだろ』

『俺は姫路さんがいれば何もいらない』

なんかさっきから、姫路さんにラブコールを送っているやつがいるな。瞬が切れそうで俊が必死に抑えている。

「そして、島田美波もいる。島田は数学だけはAクラス並の学力がある」

『おお！それは凄い！』

島田さんはドイツからの帰国子女で数学が得意。

「さらに木下秀吉だっている。そして、俺も全力をつくす」

『おお．．．．．！』

『ああ。あいつ確か、木下優子の．．．』

『坂本って小学生の頃神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『このFクラスには実力がAクラスレベルが五人いるってことだな
！！』

いつきに教室内はいけそうだ、やれそうだというふいんきになった。

「それに、北条銀河に吉井明久もいる」

．．．．．シン．．．．

士気が上がっていたのに、この一言で一気に下がっていった。って．

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕達の名前を呼ぶのさ！」

「そつだぞ雄二！せめて瞬間と同じ時に呼んで欲しかったぞ！」

「まあまあ、落ち着くでござるよ2人とも。雄二殿2人の説明は拙者してもよいでござるか？」

「じゃあ、任せる」

「では、まずこの2人は観察処分者でござる」

『それって、バカの代名詞じゃなかったけ？』

「否定できねえ．．．」

「まあ、確かにこの2人はバカの代名詞の観察処分者でござるが実

質的このクラスのエースでござるよ」

『エースだと・・・?』

「まず観察処分者のデメリットはフィードバックというものが付いており召喚獣のダメージがそのまま召喚者に何割か跳ね返ってくること」

『それじゃあ、召喚できる奴が減るってことじゃないか』

「次にメリットでござるが、普通の生徒より召喚獣の召喚数が多いため他のものより操作がうまいということ、2人の点数が8000点以上とることが出来る天才であることとござる」

『8000点!?!?』

『霧島より4000点近くも高いじゃないか!!』

『この2人がいればAクラスを倒すのも夢じゃねえぞ!!』

おお、さすが瞬。ここで雄二に説明させたら悪い所ばっか言うだろうからね。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。そこで、明久、銀河の2人は宣戦布告の使者になってもらう」

「別にいいけど・・・」

「襲ってきたら返り討ちにしてもいいのか?」

「ああ、かまわんがやりすぎるなよ?」

「なるべく気をつける」

「そうか・・・よし。みんな、この境遇は大いに不満だろう?」

『当然だ!!--』

「ならば、全員筆をとれ!出陣の準備だ!」

『おおーーーーーっ!!!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない!!!システムデスクだ!!!」

『うおおーーーーーっ!!!』

凄い土気だな。さてと、僕も宣戦布告に行くかな。

「それじゃあ、行こうか銀河」

「おう。んじゃ行ってくるぞ」

「ああ。逝ってこい二人とも」

いってこいの字が違ったような。そう思いながら宣戦布告に向かった。

最強のクラス

・N O s i d e

「「ただいま」」

Dクラスに宣戦布告へ行っていた2人が戻ってくる。

「おかえりなのじゃ2人とも。それと明久よ怪我はなかったかの？」

「うん。大丈夫だよ」

「少し、大きめな音がしたがなにやったんだ？」

「ああ。宣戦布告したらDクラスの連中が襲いかかってきたから、回し蹴りを喰らわした

だけだぞ。俊」

「Dクラスの奴も可哀想に…」

銀河の言葉に俊がそう答えた。

「おい。お前らいつまで話してるつもりだ。今からミーティングを屋上でやるからさっさとこい」

そう言い、雄二は扉を開け屋上に向う。そして、俊、島田、ムッツリーニ、瞬、姫路の順番で雄二について行く。

「俺達も行こうぜ」

「そうね。ほら、夜美、明久、木下君早く行くわよ」

「「「はい」」」

屋上へ向う一行であった。

・明久side

教室を出て雄二達に追いつき、屋上への階段を登る。

そして、先頭を歩く雄二が屋上へ通じる扉を開けて太陽の下に出た。雲一つない空から眩しい光が差し込む。

春風とともに訪れた陽光に、風ではためく姫路さんのスカートを注視しているムツツリー二とそのムツツリー二を見ていた瞬が黒椿で斬りかかろうとしているのを止めてる俊を除いて、僕らは全員目を細めた。

「銀河、明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンス前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたぞ」

銀河がフェンスに腰を下ろしながら言い。僕らも各々腰を下ろす。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな」

「んじゃ、何か買ってこねーとな」

「何だ、銀河。昼飯持ってきてないのか？」

俊が銀河に尋ねる。

「ああ…今日は2人揃って寝坊したからな」

「そうなんだよねーいやー何で2人揃って目覚まし時計電池切れに

なるんだろっ?」

銀河が起こしにきて時計を見たら、8時過ぎなんだもん驚いたよ。

「なら、銀河、明久」

「「うん?」」

俊との話を切り上げて下の購買に行こうとすると、後ろから由仁に話しかけられる。

「今日、私と夜美でお弁当作ってきたんだけど…」

「明久達も一緒に食べようよ!」

由仁と夜美がそんな事を言ってきた。

「えっ、いいのか」

「うん。元々2人に食べもらう為に作ってきたようなものだし…」

「うん。じゃあ、お願いしよっかな」

「うん。楽しみにしててね」ギュー

「うわ!いいいきなり抱きつかないでよ!夜美!」

「えへへー明久の匂いだ」

「よ、夜美!む、胸が当たってる!」

「当ててるんだよ」

うっ…やっぱり女の子だな…柔らかいし、いい匂いもする。

「と、とりあえず、試召戦争の話をしようよ!ねえ!雄二」

「あ、ああ…」

とりあえず、夜美を体からはがして雄二の方に体を向ける。夜美は

残念がつてたけど…

「ところで雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくんならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二が鷹揚にうなづく。

「どんな考えなのでござるか？」

「色々理由はあるんだが、取り敢えずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「は？でも、点数は向こうの方が上だぜ？」

俊がそう言うが僕はそうは思わない。

「確かにそれに関しては同意見だな」

「え、なんでなの銀河？」

「雄二説明パス」

「おい…まあ、いい明久。ここにいる面子を見てどう思う？」

「えっ…と…」

雄二に言われたとおりその場のメンバーを見回してみる。ふむふむ、この場には、

「美人の幼馴染が3人と幼馴染が2人と美少女が2人と画家が1人とバカゴリラが1人とムツツリが1人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!?!雄二が美少女に反応するの!?!」

「お前はどう考えてもバカゴリラだろうが!!」

「……………(ポッ)」

「ムツツリー二殿も美少女に反応するのでござるか!?!」

「お前はムツツリだろうが!?!」

ムツツリー二の方は瞬と俊が突っ込んでいた。

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリー二」

と、こちらは実際に美人の幼馴染の秀吉。中身は男だけど。

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツッコミいれた
いんだけど」「

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして雄二が説明を再開する。無視ですか。

「姫路、瞬、俊、銀河、明久に問題がない今、Eクラスなど相手に
もならんからな。だから戦っても意味が無いってことだ」

「?ならばDクラスとは正面からぶつかると厳しいのでござるか?」

「いや、そこまで厳しいというわけでも無い」

「なら、何でDクラスと?」

「恐らくだが、皆に召喚獣の操作にならすこととモチベーションの
向上、後はAクラスとやる時の種まきってところか?」

「だいたい正解だ。銀河」

「しかし、大丈夫なのか?負けたら意味ねえぞ」

「安心しろ。お前等が俺に協力してくれば勝てる。いいか、お前
等。ウチのクラスは「最強だ」

「なら、信じてやるうじゃ無いか雄二。ただし、どこかでへまをや

らかしたら、容赦なく見捨てるからな」

雄二にそう告げる銀河。

「安心しろ。そんなことは絶対無い」

「そうか……」

銀河は考える様な顔で答える。

「それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、僕らは勝利の為の作戦に耳を傾けた。

因みに、夜美達の弁当はすごく美味しかったことと明日は姫路さんが皆にお弁当を作ってきてくれるようだ。

FクラスVSDクラス前半戦

・銀河side

試験召喚戦争 FクラスVSDクラス10分前

・Fクラス教室内

「さて、皆Dクラスとの試験召喚戦争も後10分だ。作戦についてのおさらいをする」

ついにはじまる試験召喚戦争。俺達は雄二考案の作戦の最終確認をしていた。

「まず最初に回復試験を受けなければならない姫路、瞬、伊藤姉妹」

「はい」

「うむ」

「はい」

姫路、由仁、瞬、夜美の順番で返事する。

「取り敢えず、瞬は3教科ほど受けたら戦争に参加してくれ」

「承知した」

「姫路は放課後近くまでは回復試験に専念してくれ」

「分かりました」

「伊藤姉妹は銀河の情報でAクラス並の点数があると聞いている。よって、今回は回復試験のみで戦争へ参加はするな」

「分かったわ」

「ええ〜。夜美頼むよ。ね」分かったよ〜」

「よし、次に先行部隊。部隊長に銀河副部隊長には明久と秀吉を任命し他12名計15名でいってもらおう」

「「「おう!!」「」」」

先行部隊に選ばれたメンバーが元気よく返事する。

「まず、銀河がDクラスに1番強い攻撃をお見舞いする」

「だが、俺の1番強い攻撃は範囲が広い上にチャージに時間がかかるぞ」

「その間は他のメンバーに時間を稼いで貰う」

「そうだな…お前等、俺のチャージが終わったら、右手を挙げるから全員俺より後ろに下がれ。戦死して補習室に送られなかったらな」

「「「お、おう」「」」」

テンションが少し下がったな。

「次に中堅部隊。部隊長に俊副部隊長に島田他16名計18名だ」

「「「おう!!」「」」」

「中堅部隊は先行部隊の人数が8名までに減ったら向かってくれ。」

もしくは、Dクラスの中堅部隊が出てきたら、援護に向かってくれ。」

合図は俊か島田に任せる」

「了解」

「分かったわ」

俊と島田が返事をする。他の部隊の作戦の確認も終わりついに戦争3分前となった。

「よし、お前らよく聞け!!これから俺達はDクラスとの戦争がはじまる!!だが負けは絶対に許されない!!」

「「「おう!!」「」」」

「俺達はこんなところでつまづいてる暇は無い！！絶対に勝利を手にして、Aクラスへの弾みにしろ！！」
「「「おう！！」」」
「よっしゃ。Fクラス出るぞ！！」
「「「おうーーーー！！」」」

今、Fクラスの心が一つになった。

・N o s i d e

試験召喚戦争 FクラスVS Dクラス 渡り廊下

「けっ、Fクラス如きが返り討ちにして殺るぜ！！」
「ああ。俺達を舐めたことを後悔させてやる」

Dクラスの方はやはり格下のFクラスが相手の為油断している。

「見事に油断してくれてるね」
「そうだね銀河。これならやりやすそうだよ」
「まあ、油断したら負けじゃがのう」

銀河、明久、秀吉の順で敵への感想を言う。

「では、これより試験召喚戦争をはじめます……戦争開始！」

学年主任の高橋先生の立会い、彼女を中心にフィールドが展開される。

先陣を切ったのは、Fクラス

「Fクラス先行部隊隊長北条銀河」

「同じくFクラス先行部隊副隊長吉井明久」

「Dクラスに総合科目勝負を挑みます！召喚獣召喚、サモン！」

銀河と明久の足もとに幾何学的な凶形が現れ、その後に召喚獣が現れた。

銀河は清祥学園の制服をモチーフにしたバリアジャケット両手には橙、赤、白のトリコロールの2丁拳銃を持ったデフォルメされた銀河。

明久は、フェイトのバリアジャケットの男物、手には召喚獣の身長より大きい金、黄色、銀のトリコロールの槍を持ったデフォルメされた明久。

「やっぱり、この装備なんだね」

「まあ、俺達の専用武器だからな」

「そうだね。じゃあ、行こっかアース」

『OKマスター』

『始めるぞサン』

『YESマスター』

明久はブレスレットから銀河は指輪から機械音のする女性の声で返事がされる。

「よし！時間稼ぎを頼むぞ！！」

「了解!!」

明久が敵陣に切り込む。その間に銀河が背中から天使のような翼が現れる。

「な、何だ!? あれは!?!」

「う、腕輪なのか!?!」

「て、点数を確認しろ!?!」

『Fクラス 北条銀河 総合科目 940点』

「う、腕輪ではないようだな」

「じゃあ、あれは?」

「それは、元々俺の召喚獣についてる能力だよ」

敵が驚いてる間に空へ飛ぶ。更に他のFクラスメンバーも召喚を完了させる。

「サン! モードライフル」

『OK! モードライフル』

2丁拳銃を連結させライフルにする。

「カートリッジロード!」

『OK! カートリッジロード!』

ライフルからカシャンと音がなり地面に薬莢が4つほど落ちる。

「サンシャインブレイカーチャージ開始」

『チャージ開始。…5%…10%…15%』

ライフルの先端にオレンジ色のエネルギーが集まっていく。

「くっ！何かをするつもりか？弓や遠距離攻撃ができる奴はあいつを狙え！！」

「分かった！！」

弓など空中へ攻撃可能なDクラスメンバーが銀河に近づいて行く。メンバーは4人。

「させないよ！高橋先生そのDクラス4人に総合科目勝負を挑みます！！」

「何、Fクラスのくせに俺達4人をまとめて相手だと！？」

「舐めやがって！！」

「返り討ちにしてくれるぜ！！」

「行くぞ！！」

「『『『召喚獣召喚！サモン！！』』』」

『Fクラス 吉井明久 総合科目 910点VSDクラスモブ4人
総合科目 平均1200点』

「アース！カートリッジロード！」

『OK！カートリッジロード！』

明久は一発分カートリッジをチャージする。すると、明久の槍に雷が宿る。

「な、何だ！？あれは！？」

「ひ、怯むな！相手は槍だ！近付かなきゃこっちには攻撃できない

「!!」

「それはどうかな?」

「……なに!?!」

「行くよ…雷光一閃龍牙!!」

明久が雷を纏った槍を相手に向かって振りかぶる。すると龍の形をした雷がDクラス4人に向かって行く。いきなりのものでDクラス4人は反応できずまともにくらい戦死した。

『Fクラス 吉井明久 総合科目 900点VSDクラス4人 総合科目 0点』

「戦死者は補習室へ集合!!」

今さつき明久にやられた召喚獣を操る生徒が、あっという間に担がれてしまった。

「さあ来い、この負け犬が!!」

「い、嫌だ!鬼の補習は嫌だあああ!!」

「あんな地獄、耐えられる気がしない!!」

「頼む!見逃してくれ!!」

「あれは補習何かじゃない!拷問だ!!」

「安心しろ。これは立派な教育だ。趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎と言う、立派な模範生に仕立て上げてやる!」

「……た、助けてくれ!!い、嫌だあああ!!」

死に物狂いで逃げようとするも、びくともせず。そのまま生徒は、補習室へと連行されていった。

「よし…皆!Dクラスの士気は下がってる!今のうちに攻めるよ!

！」

「くくくおう!!」「くく」

「お前らチャージが終わったから全員下がれ!!」

銀河の召喚獣のチャージが終わり召喚者の銀河が手を挙げる。

「皆!下がるんだ!戦死したくなかつらね!!」

「くくくおう!!」「くく」

Fクラスの全員が銀河より後ろまで下がる。

「な、何だ!?!何をするんだ!!」

Dクラスは銀河が何をするのかわからず怯えている。

「高橋先生。フィールド内のDクラス生徒に勝負を挑みます!いつとくが勝負を断ったらそのまま補習室行だけ!!」

『くっ!召喚獣召喚!サモン!』

フィールド内にいるDクラス生徒10人が召喚獣を召喚する。

『Fクラス 北条銀河 総合科目 940点VSDクラスモブ10人 総合科目 平均1200点』

「いくぜ?サンシャインー!!」

「くっ!あいつの後ろにいる連中のところに急げ!!」

『おおおおー!!』

Dクラスが明久達のところまで召喚獣を走らせるがすでに遅い。

「ブレイカー!!」

ライフルからオレンジ色の砲撃が発射されフィールド中を包み込む。そして、砲撃が放たれた時に出来た光が消えるとDクラスの召喚獣が全て消滅…つまり戦死していた。

『Fクラス 北条銀河 総合科目 740点VSDクラス モブ1
0人 0点』

「Dクラス先行部隊全滅！お前ら畳み掛けるぞ!!」
『おっ—————!!!!』

Fクラス先行部隊被害数0人

FクラスVSDクラス中盤戦1

・明久side

Dクラスの先行部隊を倒した僕達はDクラスの中堅部隊と戦っていた。

「Fクラス吉井明久！Dクラス2人に総合科目勝負を挑みます！試験召喚獣！サモン！」

「くっ！舐めやがって！サモン！」

「返り討ちにしてやるぜ！サモン！」

『Fクラス 吉井明久 総合科目 570点VSDクラス2人 総合科目 平均 1100点』

「死ね！吉井！」

「甘い！」

敵一人の召喚獣が剣で切りかかってくるが槍で受け流し心臓に槍を突き立てる。

「隙あり！」

その後ろからハンマーを持ったDクラスの召喚獣が明久の召喚獣の頭を狙うがとっさに明久がよけ手に雷を宿し喉元に突き刺す。

『Fクラス 吉井明久 総合科目 690点VSDクラス 2人 総合科目 0点』

・俊 side

「俊！北条達がDクラスの中堅部隊と渡り廊下で交戦中よ！」

旧校舎の廊下をポニーテールの少女が駆ける。

「美波。戦況はどんな感じだった？」

「Fクラスの劣勢だったわね」

「そっか…」

わかってた事とはいえやっぱりきついな。まあ、そつだとしても俺達は俺達のやる事をするだけだ。

「美波。全軍に伝達」

「なに？」

「Dクラスに気づかれないようにこのまま進んでいくと言って」

「わかったわ」

とりあえずは様子見だな。

「俊！」

「銀河。どうした？」

渡り廊下をめざして進んでいると先行部隊部隊長の銀河がこちらに来た。

「先行部隊メンバーが後7人何だ。今すぐ向かってくれ」

「分かった。銀河の方は？」

「俺は回復試験を受ける。なるべく早く帰ってくるようにする」

「了解だ」

キャラクター紹介

【主要キャラクター紹介】

【名前】 北条銀河ほつじょうぎんが

【学年】 2年Fクラス

【性別】 男

【一人称】 俺

【身長】 172cm

【容姿】 髪は金色で後ろの髪をゴムで結んでいる。目は赤色。かなりのイケメン。髪をほどけば女子に見える。

【好きなもの】 仲間

【嫌いなもの】 管理局上層部で違法な事をやってる連中。卑怯者。仲間を傷つける奴。

【学力関係】

【得意科目】 日本史、世界史：500～2000点

・ 英語、数学：450～800点

【普通科目】 現国、古典以外の科目：400～600点

【苦手科目】 現国、古典：300～450点

【総合科目】 5750～9500点

【備考】

- ・ 本作主人公。性格は明るいが基本的は冷静なクールな事が多い。女性にすごくモテるハーレム野郎。明久より鈍感でも無いかな？
- ・ 明久と同じ観察処分者
- ・ 世界一の企業北条グループの一人息子で色々な方面に知り合いが

いる。

- ・時空管理局に所属しており役職は執務官。最高評議会の悪事を知り最高評議会を始末した張本人。
- ・明久、秀吉、瞬、恭介、由仁、夜美、なのは達とは小学生からの幼馴染。俊、ムッツリーニ、雄二とは中学生からの友達である。
- ・趣味は読書、ゲーム、発明、料理など

【召喚獣】

【武器】 インテリジェントデバイス：サン・バースト<通常は2丁拳銃だが、ライフル、双剣、長剣、鞭、弓、ブーメラン、槍にもなる万能武器>カートリッジシステムでカートリッジをロードすると炎をサン・バーストに宿す。

【服装】 清祥学園の制服をモチーフにしたバリアジャケット

【腕輪】 武器に水、氷、雷、風を付属する。

【指輪】 精霊モード

<発動キーワード>

・我に宿りし精霊達よ。我に力を与えたまえ

【使用技】

- ・アクセルシューター
- ・ショートバスター
- ・デイバインバスター
- ・エクセリオンバスター
- ・ストレイトバスター
- ・スターライトブレイカー
- ・バインド
- ・プロテクション

【オリジナル技】

・リフレクトバスター：銀河が使う長距離砲。使う時はライフルモード
・リフレクトツインバスター：リフレクトバスターの2丁拳銃モードの時に使う長距離砲。一発分の威力は通常のリフレクトバスターの半分。

・炎舞衝撃波：剣に炎を宿しその炎を宿した剣を敵に向け振り抜きその時発生する衝撃波を敵にぶつける。長剣モードで使う
・炎舞双衝撃波：双剣モードで使う炎舞衝撃波
・サンシャインブレイカー：周りの魔力と自然エネルギーを取り込み放つ表技の中では最強の収束系長距離砲魔法。自身の魔力がなくても使える魔法。ライフルモードと2丁拳銃モードで使用可能。

【裏技】七つの大罪をモチーフにした技と銀河自身が強力すぎる技のゆえに封印した技などがある。

・闇色の辺獄烈火ヘルフェーゴール

＜魔導師の魔法（召喚獣の場合全ての攻撃）を全て無効化し燃え散らす闇色の炎＞大罪の象徴は【怠惰】

・二色の冥府双灯火マモン

＜紅色と蒼色の二色の炎を合わせて放つ裏技ではナンバー2の威力を誇る。基本は紅色の高温の炎と蒼色の低温の炎がフェニックスのような形をしていてそれを相手にぶつける。手に宿し刀のように使う事も可能＞大罪の象徴は【強欲】

・青色の煉獄業火サタン・ブレイズ

＜小さな青い火の玉を発生させ一気に周りを燃え散らす。銃に炎を詰めて使う事もできる＞大罪の象徴は【憤怒】

・無色の地獄浄火ヘルセプテ

＜無色の炎自分の周りに発生させその炎に触れた者を一瞬で消滅させる。炎の温度は全ての技の中では最高温度（温度は太陽の核の10倍）＞大罪の象徴は【暴食】

・ソルティック・オア・ブレイカー
＜銀河がバーストモードを発動して使用可能なバーストピットを8つ展開してライフルとピットの合計9つでブレイカーを放つ。正しく最強の収束系長距離砲。フルパワーだと星一つ破壊できる。シールド破壊効果付き＞

【時空管理局関係】

【資格】 時空管理局執務官、戦技教導官

【階級】 一等空佐（本来は大将）

【術式】 ミッド主体のベルカとの混合ハイブリッド

【魔力ランク】 SSS+（リミッター付きAAA+）

【魔力光】 オレンジ

【魔力変換資質】 火、水、氷、風、雷

【レアスキル】 炎神、創造神の力、幻覚魔法

【デバイス詳細】

【名前】 サン・バースト

【型】 インテリジェントデバイス

【待機状態】 オレンジの丸い宝石が埋め込まれた指輪

【武装形態】 通常は2丁拳銃モードで他にもライフルモード、双剣モード、長剣モードを好んで使う。

【性格】 主人には絶対服従。女性型

【特殊モード】 バーストモード

＜サン・バーストにかかっているリミッターを全て外し能力を解放する究極のシステム。これを使用すると、背中に炎でできた翼と炎の霊刀オウエンと呼ばれる日本刀とシャーラと呼ばれる盾を装備する。発動できる時間は15分間＞

【名前】 吉井明久よしあきひさひさ

【学年】 2年Fクラス

【性別】男

【一人称】僕

【身長】170cm

【容姿】原作とほぼ変わらず

【学力関係】

【得意科目】日本史、世界史：500～2000点・物理、現国、
古典：450～800点

【普通科目】数学と英語以外の科目：400～600点

【苦手科目】数学、英語：400点

【総合科目】5150～9000点

【備考】

・原作より頭がかなりいいがその分恋愛関係での鈍さが増している。
3歳の頃とある組織に誘拐され人体実験のモルモットにされた過去
があり（犯人は管理局上層部の1人）6歳の頃力が暴走して明久以
外死亡。9歳の頃銀河に出会ったが銀河が組織の追っ手と思い戦闘。
何回かの戦闘を繰り返す内に徐々に心を開き信用していき、最後
は銀河と一緒に明久を誘拐した組織を潰した。
子供が好きで孤児園に寄付をしたり現在ではリリなの、ヴィヴィオ、
リオ、コロナ、イクスヴェリア、アインハルト、エリオ、キャロを
高校一年生の春休みの時に孤児園から引き取り父親として懐かれて
いる。というか子供全員ファザコン（笑）

【召喚獣】

【武器】槍<雷を付属させ、遠距離からの攻撃を可能とした万能武
器>

【服装】StrikerSの時のフェイトのバリアジ

ヤケツトの男物

【腕輪】強化：キーワード<ブースト>吸収：キーワード<ドレイン>

【指輪】雷神化：キーワード<轟け。雷鳴の神よ。その力を我に与えたまえ>

【使用技】

- ・フォトンランサー
- ・プラズマランサー
- ・サンダースマッシャー
- ・プラズマスマッシャー
- ・トライデントスマッシャー
- ・サンダーレイジ
- ・ソニックフォーム
- ・真・ソニックフォーム
- ・プラズマザンバーブレイカー

【オリジナル技】

・雷光一閃龍牙：槍に雷を宿しそのまま振り抜く。振り抜いた時の雷は龍の形をしている。二閃、三閃と増える毎に龍も増える。（龍は100まで出せる）

・ファイナルソニックフォーム：真・ソニックフォームより速さを上げる為に開発した明久のみが使用できる技。これを使った場合負ける事は無い。使用時間は15分間が限界。それ以上使うと身体に途轍もない負担がかかる。

・ジゴスパーク：黒い雷を相手に放つ。単純だがその分威力も高くシールド破壊効果付き。

・雷神の裁き（Judgment of god of thun

der) : 空中に雷の槍を数百本発生させそのまま相手に落とす。
非殺傷設定ができない技。シールド破壊効果付き。

・演舞・雷獣の舞：明久がソニックフォーム状態で使う接近戦用の奥義。まず敵に突きを放ち吹き飛ばしすぐさま後ろに回り込んで蹴りを入れる。更に正面に回り込んで上空に蹴り上げそのまま空中で攻撃を加えていく。最後に空中で上空に更に蹴り上げラストに腹を蹴り地面に叩き落とす。

・ライトニング・デス・ブレイカー：明久の中での最強の収束系長距離砲。雷を収束して放つ。

【時空管理局関係】

【資格】 戦技教導官。時空管理局執務官。 本局医療資格

【階級】 一等空佐（本来は中将）

【術式】 古代ベルカ主体のミッドとの混合ハイブリッド

【魔力ランク】 SSS+（リミッター付きAAA+）

【魔力変換資質】 雷

【魔力光】 黄色

【レアスキル】 雷神、癒しと再生の神の力、レリックマジック（レリックを体内に埋め込まれたがその力を今は制御している。レリックの力でユニゾンデバイスの力を手に入れた）

【デバイス詳細】

【名前】 ジ・アース

【型】 インテリジェントデバイス（普段は金色のブレスレット）

【性格】 明久を優しくも厳しく見守るお母さんみたいな性格。

【武装形態】 金と黒色の槍

【名前】 服部瞬 はつとりしゅん

【学年】 2年Fクラス

【身長】 169cm

【一人称】 拙者

【性別】 男(男の娘)

【容姿】 肩にかかるぐらいの黒髪に蒼目に中性的な顔つき。

【学力関係】

【得意科目】 現国、古典：700～1200点、日本史、世界史：500～900点

【普通科目】 数学、英語以外の科目：420～600点

【苦手科目】 英語、数学：370～460点

【総合科目】 5980～8580点

【備考】

銀河と明久の幼馴染の1人。いつものメンバーの中では1番の常識人。闇の書から生まれたマテリアズを引き取っている。なぜか語尾にござるをつけるが普通の喋り方もできる。以外にアニメなどが好きでリボーンの時雨蒼燕流を使い新たに特式十三の型を生み出した刀の天才。
しかし、怒るととても怖い。(銀河達曰く、瞬だけは本気で怒らすならしい)

【召喚獣】

【武器】 左右にある日本刀。<右刀が黒椿、左刀が白椿>

【服装】 白の袴をしたバリアジャケット

【腕輪】 無限の一振り<点数を消費させずに技を放つ。効果は5分間

【指輪】水神、氷神化。キーワード<煌びやかに舞え水と氷の力よ。その力を我に与えたまえ>

【使用技】

- ・氷結の息吹・アーテム・デス・アイセス
- ・響け終焉の笛ラゲナロク
- ・エターナルコフィン
- ・時雨蒼燕流一の型、十二の型まで
- ・バインド

【オリジナル技】

- ・氷塊一閃：氷を刀に宿し敵を斬りつける技。
- ・ヘイルダム：本来は海上でしか使用できなかったが、瞬の氷の魔力変換資質と魔力量で陸でも使用可能。
- ・水流撃砲：大量の水を敵にぶつける広域魔法。
- ・氷簫乱舞：無数の氷の刃を空中に発生させ打ち下ろし攻撃する広域魔法。
- ・時雨蒼燕流特式十三の型斬撃豪雨：特式十の型燕特攻と特式十二の型斬雨を合成して作った究極奥義。
スコントロ・ディ・ローンディネ
- ・氷の世界：自分から半径5kmを凍らす広域魔法。
- ・ブリューナクブレイカー：瞬が持つ魔法の中では最強を誇る収束系長距離砲。

【時空管理局関係】

【資格】XV級次元航行艦船エクシード艦長。海上指令局長。特別顧問捜査官。

【階級】陸：大将。海：提督。空：一等空佐

【術式】 古代ベルカ主体のミッドとの混合ハイブリッド

【魔力ランク】 SSS（リミッター付きAAA）

【魔力変換資質】 水、氷

【魔力光】 蒼色

【レアスキル】 水神、氷神

【デバイス詳細】

【名前】 水連氷花

【型】 インテリジェントデバイス（通常は刀の形をしたネックレス）

【性格】 クールで瞬をしっかりとサポートする。男性型

【武装形態】 左右に日本刀。右刀に黒椿、左刀に白椿。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0879u/>

バカと幼馴染と召喚獣

2011年12月30日03時46分発行